

静清開発地域

土地分類基本調査

清 水

5 万 分 の 1

国 土 調 査

静 岡 県

1 9 7 4

序 文

国土は、将来にわたってかけがえのない生活の場であり、生産の基盤であります。この限られた国土の開発整備ならびに保全を合理的な土地利用計画のもとにすすめるため、国土の実態を把握する必要があります。

さいわい国において大規模開発プロジェクト地域の土地条件を明らかにするため、昭和46年度より国土調査法に基づく開発地域土地分類基本調査が制度化されました。

本県は従来から「中部圏開発整備法」に基づく都市開発区域、工業特別地区の開発、また保全区域の整備を進めている段階で、これに的確に対処するため、昭和46年度より順次土地分類調査を実施することになり、すでに縮尺5万分の1「浜松」「掛川・御前崎」「静岡・住吉」の各図葉について調査し成果も利用されている。

今回は「清水」図葉について調査を実施しました。

本地域は県中部地域の広域圏開発計画が策定され、多彩な開発整備がすすめられています。

この図葉は行政上に利用されることはもちろん広く関係者に利用されることを希望しますとともに資料の収集調査、図簿の作成に協力いただきました関係各位に深く謝意を表します。

静岡県農地部長 白石正夫

まえがき

- 1 本調査の事業主体は静岡県であり、国土庁土地局国土調査課の指導をえて実施したものである。
- 2 本調査の成果は国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
- 3 調査の実施、成果の作成関係機関および関係担当者は下記のとおりである。

総合企画調整編集	静岡県農地部農地企画課	課長	山崎 弘二朗
		主幹	鈴木 謙
		技術吏員	白井 春雄
地形調査	静岡大学教育学部	教授	松本 繁樹
	国立沼津工業高等専門学校	講師	浅黄谷 剛寛
表層地質調査	静岡大学理学部	教授	土 隆 一
		助教授	黒田 直
土 壤 図	静岡大学農学部	教授	加藤 芳朗
	東京農工大学	助教授	浜田 竜之介
	静岡県農業試験場	主任研究員	近藤 鳴雄
	静岡県林業試験場	研究主幹	鈴木 正
		主任研究員	梶 富美夫
土地利用現況図	静岡県農林水産部林政課	主 査	菊地 五郎
		〃	鈴木 広司
		技 師	白井 直方
	静岡県農業試験場	主任研究員	近藤 鳥雄
	駒沢大学		竹村 利夫
利水現況図	静岡県農地部農地企画課	技 師	白井 春雄
協 力	東京農工大学農学部	教授	黒部 隆
	駒沢大学	助教授	長沼 信夫

目 次

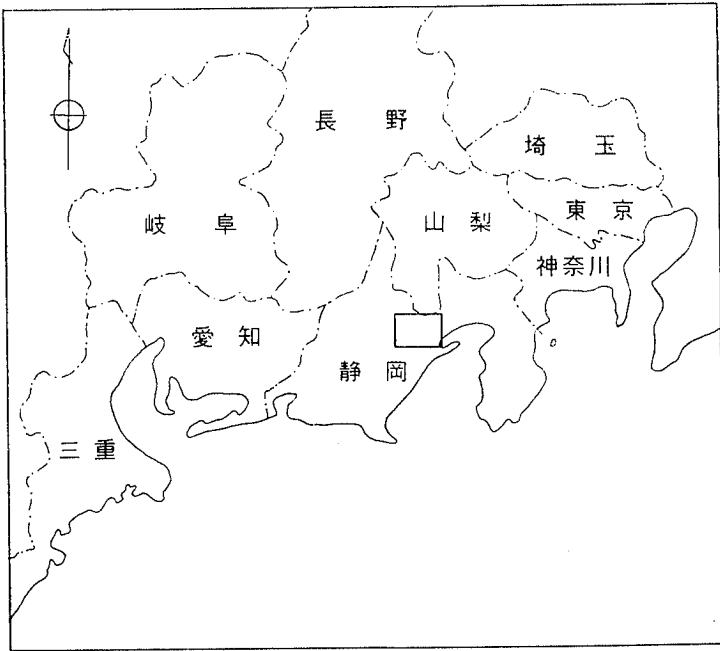
序 文 総 論

I	行政区画	1
II	人口	2
III	図葉内の地域の特性	2
IV	主要産業の概要	3
V	開発の現状とその方向	3

各 論

I	地形分類図	7
II	表層地質図	18
III	土 壌 図	20
IV	傾斜区分図	25
V	水系・谷密度図	26
VI	利水現況図	28
VII	土地利用現況図	29

位置図



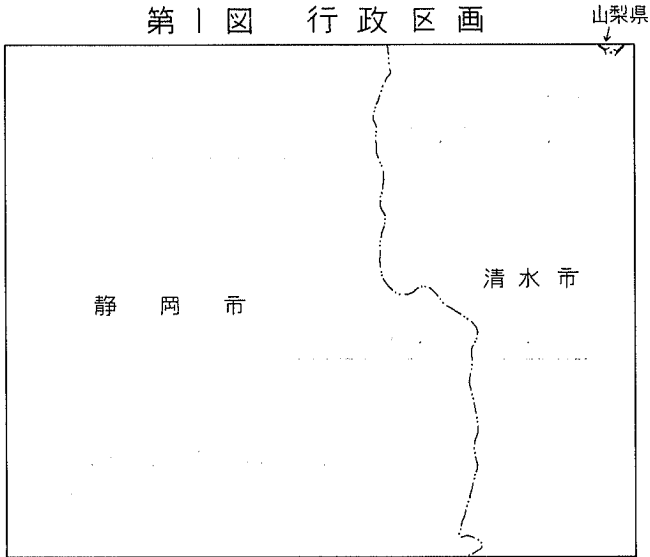
総論

I 行政区画

1 位置

「清水」凶薬は静岡県の中央部に位置し経緯度は東経 $138^{\circ} 15' \sim 138^{\circ} 30'$ 、北緯 $35^{\circ} 00' \sim 35^{\circ} 10'$ である。

第1図 行政区画



Ⅱ 人 口

第1表 世 帯 数・人 口

市町村名 区分		静岡市	清水市	備 考
		昭和40年	人 口 計(A)	
	世帯総数	87,557	50,530	
昭和45年	人 口 計(B)	205,629 210,749 416,378	117,553 117,413 234,966	
	世帯総数	109,349	59,393	
40年 50年 の 比較	人 口 計	23,604 25,069 48,673	8,092 8,315 16,407	
	世帯総数	21,792	8,863	
	人口伸び率 B/A	13.2	7.5	

(注 国勢調査)

東京、大阪、名古屋などの大都市圏を結ぶ、いわゆる東海道メガロポリスの中心的位置にある本県は、その恵まれた立地条件を反映して今後においても人口が増加するものと見込まれている。

Ⅲ 図葉内の地域の特性

本地域は静岡市と清水市の山沿地帯を中心とした、みかん、茶、筍、しいたけ、造林等農業、林業が盛んな地域である。

又都会を離れて四季おりおりの自然に親しみ文化財をたずねようという東海自然歩道コースが本図葉のほぼ中央の文珠岳より東西に連なっている。

本地域の気象の特色は第2表のとおり。

Ⅳ 主要産業の概要

1 農林業

農業……本地区は茶，柑橘栽培が意欲的に行なわれ，全国的にも著名な生産地を形成している。

林業……本地区のほとんどが民有林で，人工林として杉，ひのきが植栽されている。又しいたけも盛んである。

Ⅴ 開発の現状とその方向

以上のような地域的特性を受け，本地域の開発の現状とその方向として次の点があげられる。

- 1 農業として，茶，みかんの歴史が古く，優良品への改植が年々行なわれている。また，みかんについて，本地区の特色を生かすための貯蔵庫建設を強力に推進している。
- 2 林業として，森林の「開発と保全」との調和が重要視されている現状で，林業経営の合理化と近代化を目的に基盤整備事業を積極的に実施し，山村地域社会の維持増進を図り森林が有する多面的な機能を総合的に発揮させることが望まれている。

第2表 静 岡 気

要 素	单 位	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月
平 均 氣 压	mb	1011.6	1013.5	1012.3	1014.6	1010.1	1007.7
平 均 氣 温	°C	5.6	6.3	9.1	14.3	18.5	21.5
最 高 氣 温 (平 均)	"	11.0	11.5	14.0	18.8	23.0	25.2
氣 温 高 極	"	25.7	24.3	24.0	28.8	33.5	34.3
最 低 氣 温 (平 均)	"	0.4	1.2	4.1	10.1	14.3	18.2
氣 温 低 極	"	-6.6	-5.3	-3.5	-0.5	7.0	12.5
平 均 湿 度	%	54.2	55.9	60.7	69.9	73.4	79.9
湿 度 極 小	"	10	12	8	15	14	32
平 均 降 水 量	mm	80.6	76.9	159.0	231.3	257.6	395.7
最 大 日 雨 量	"	61.5	46.0	74.5	103.0	172.3	218.4
降 水 日 数 > 1mm	日	5.1	5.6	8.9	10.9	11.0	13.0
" > 10mm	"	2.1	2.6	5.2	5.9	6.5	8.1
" > 30mm	"	1.0	0.7	1.4	2.6	2.7	3.9
平 均 風 速	%	3.1	3.0	3.2	3.1	2.8	2.6
最 大 風 速	"	14.5	13.3	13.3	15.0	15.2	14.7
平 均 曇 量	日	3.6	4.7	5.5	7.1	7.4	8.5
日 照 時 間	h	215.5	193.1	207.3	176.4	199.0	147.6
日 照 率	%	68.7	63.1	56.1	45.2	46.0	34.1
快 晴 日 数	日	16.1	10.7	8.7	4.0	3.4	1.4
曇 天 日 数	"	6.4	8.8	11.4	17.9	18.6	22.3
霧 日 数	"	0.7	0.6	1.1	1.3	1.7	1.5
雷 電 日 数	"	0.4	0.1	0.7	0.8	0.8	2.1
霜 日 数	"	13.0	11.3	6.5	1.1	0	0
結 冰 日 数	"	15.6	12.8	4.4	0.2	0	0
雪 日 数	"	—	2	—	—	—	—
積 雪 日 数 > 10cm	"	—	—	—	—	—	—
" ≥ 10cm	"	—	2	—	—	—	—

各 論

I 地形分類図

1 地形の概要

本図葉のほぼ中央には、安倍川が直線状をなして南流している。

安倍川の谷の西側は、ほぼその全域が安倍山地である。大・中起伏の堂々たる山地で、ここには安倍川に流入する西河内川^{にしごうち}、中河内川^{なかごうち}、足久保川^{あしくぼ}、薬科川^{わらしな}などの大支流が、いずれもNWからSE方向に流れ下っているが、こういった流路方向は赤石山地の隆起時の最大傾斜方向に従ったもので、その意味でそれらは必従川の性格をもちあわせているものと思われる。

いっぽう安倍川の谷の東側も、南部の低地を除けば、その大部分が竜爪山地^{りゆうそう}、庵原山地^{いはら}とで占められている。このうち竜爪山地の中心部分は、フォッサ・マグナの西縁すなわち糸魚川—静岡構造線の西側に噴出したアルカリ火山岩類の山列であって、この図葉の最高点・1,401m 三角点から真富士山(1,337m) — 竜爪山(1,051m) — 一文珠岳(1,041m)を経て、賤機山^{しずはた}の山列へと続いている。いっぽうの庵原山地は、この静岡構造線の東方に続くもので、興津川上・中流域から巴川^{おきつ}・庵原川などの北方流域にかけて広がっている。

本図葉では低地の占める面積は比較的狭いが、そのうちで最大の広がりを示すのが巴川流域から庵原川・波多打川流域にかけての俗に清水平野と呼ばれる低地である。その大半は軟弱・低湿な三角州性・後背湿地性の低地であるが、背後の山地・丘陵地からの出口付近には小規模な扇状地の発達もあり、また清水の市街地の主要部は比較的高燥な3列の砂堆地からなっている。なお本図葉中には、丘陵地・台地の占める面積はわずかであるが、ごく小規模な河岸段丘は全ての河谷に沿って数多く存在している。

2 地形区

本図葉の地形区については、海拔高度・起伏量・谷密度・傾斜分布・地形面の性質・構成物質・地域的なまとまりなどを基準にして以下のような地形区を設定することができる。

地形区分

I 山地	A 安倍山地	1 朝比奈山地 2 藁科山地 3 大棚山地 4 西河内山地 5 見月山地
	B 竜爪山地	1 竜爪山地 2 賤機山地
	C 庵原山地	1 高山山地 2 興津山地 3 中河内山地
II 丘陵地	A 草雑台地 B 嶺台地・丘陵地 C 松野台地	
III 低地	A 安倍川流域低地	1 藁科川流域谷底低地 2 安倍川流域谷底低地
	B 巴川流域低地	1 羽高低地 2 麻機低地 3 長尾川低地 4 巴川中流低地 5 塩田川・山原川低地 6 有度山北麓扇状地 7 矢部・駒越海岸低地 8 清水砂堆地 I 9 清水砂堆地 II 10 清水砂堆地 III 11 清水港埋立地
	C 庵原川・波多打川流域低地	
	D 興津川流域低地	

2 地形分類

安倍山地 (IA)

安倍川の谷の西側、本図葉の西半分を占めるのがこの山地で、広義の「赤石山地」にוותは、次の竜爪山地と共に、その東南翼の一部に当ることになる。最高点は図葉の西北隅近くにあつて、海拔約 1,150m であるが、図葉中には大岳 (1,109m)、天狗山 (1,020m)、見月山 (1,047m)、大棚山 (1,008m)、突先山 (1,022m) など 1,000m を越す高山も多い。これら高山の山頂部分 (海拔 900~1,100m) とそれらよりもやや低い 600~700m 高度の山頂付近には、前輪廻の侵蝕面遺物と思われる緩斜面が存在しており、それ以下の急な山腹斜面とは明瞭な対照を示している。

起伏量の上からみると、この山地の西および北寄りの大部分は $400\text{m}/\text{km}^2$ 以上の大起伏山地に当り、残りのほとんども中起伏山地として、西河内川—足久保川—水見色川—葦科川にかけて連続した分布をみせている。また傾斜分布の上からも、そのほぼ全体が 20° 以上で、しかも面積のほぼ 2 分ノ 1 が 30° 以上、一部は 40° 以上という大傾斜を示している。

なおこの安倍山地も含めた本図葉中の山地には、大小各種規模の特異な緩傾斜地形が存在している。そのあるものは単なる山腹—谷壁緩斜面であるかも知れず、またあるものは断層に關係した緩傾斜地である可能性もあつて、現在までのところその成因は十分には判らない。しかしその内のあるものは、この付近の大起伏・急傾斜と基盤岩の脆弱さを反映した古い崩壊・地汙り、土石流などに起因した地形ではないかと思われる。これらの緩傾斜地は、急峻な山地内に孤立・点在するミカン園・茶畑などとして現に利用されていることが多いので、特に図示しておいた。

なお安倍山地は、この山地を刻む葦科川、足久保川、西河内川、中河内川などの必従谷によって、「朝比奈山地 (IA₁)」、「葦科山地 (IA₂)」、「大棚山地 (IA₃)」、「西河内山地 (IA₄)」、「見月山地 (IA₅)」の 5 つの小山地に分けることができる。

竜爪山地 (IB)

安倍川の左岸にある山地で、東側の境は静岡構造線に一致する。したがつてこの山地までが赤石山地の東南翼を形成することになり、厳密な意味での西南日本外帯山地の東限の一部に当ることになる。主脈は安倍川の谷とほぼ並行に、1,401m 三角点—真富士山—竜爪山—文珠岳を経て賤機山の山列に続くが、これが静岡構造線に沿つてその西側に噴出し

た粗面岩・流紋岩類のいわゆるアルカリ火山岩類の山列に当るものである。この主脈の西側、安倍川の谷底との間には、古第三系からなる山腹斜面部があるが、これも便宜上この竜爪山地に含めておく。

この山地は、鯨ヶ池^{はだか}一羽高間のコル部で、それ以北の狭義の「竜爪山地 (I B₁)」と以南の「賤機山地 (I B₂)」とに分けることができる。前者はその大部分が起伏量400m/km²以上、斜面の傾斜も20°以上、かなりの部分が40°以上の堂々たる大起伏山地をなしている。いっぽう後者の賤機山地は、最大幅ですら1km未満の痩せ山列であるため、起伏量では200m/km²以下の小起伏山地となるが、斜面傾斜では30°前後、一部は40°以上の大傾斜を示している。

なおこの山地のほぼ中央の^{たわらみね}俵峰には、従来暗々裡に河岸段丘と考えられてきた緩斜面が高度600~370mにわたって存在しているが、しかし実際には段丘礫層がみつからず、面自体にも複雑な傾斜と起伏があることなどから、ここでは「山地内における緩傾斜地 (I)」として表現しておく。

庵原山地 (I C)

静岡構造線以東の山地が庵原山地である。この山地の山頂高度は800m前後であるが、南縁では巴川上流、塩田川、庵原川、山切川、波多打川などの南北流によって分たれた高度300—200mの狭長な山稜となり、その先端は巴川流域の低地に対して、出入に富んだいわゆる沈水型の山麓線で終っている。南半でのこれらの河谷および北半での興津川上流の谷(出羽一川合野間)や中河内川の河谷は、いずれも北々西一南々東の方向をとっているが、こういった方向はこの地域の地質構造のそれに一致していて、その意味でこれらの河谷は適従谷的性格をもっているものと考えられる。河谷と同じく山稜もほぼ南北方向をとっているが、その東西両斜面は一般に非対称を示し、西側に緩く東側に急斜した一種のケスタ・リッジをなしている。なおこの山地にも「緩傾斜地 (I), (II)」が存在しており、そのうち大規模なものは興津川上流西岸の湯野、寺社畑一貝伏付近、長尾川上流東岸の平山付近、山切川源流の吉原付近などに認められるし、小規模なものは波多打川、中河内川流域に数多く存在している。

なおこの庵原山地は、静岡構造線とその東方で静岡層群と和田島層群とを分ける断層線(庵原川一吉原一興津川(川合野一出羽))とによって、その間にはさまれた「高山山地 (I C₁)」。そのさらに東方で興津川(土一清地)より南側に当る「興津山地 (I C₂)」、そ

の北側に当る「中河内山地(ⅠC₃)」の3つの小山塊に分けることができる。

高山山地は高山(836m)をほぼ中心として、北に尖った三角形の広がりをもつ山地で、南および興津川沿いの部分は中・小起伏山地をなすが、中心の高山付近および北半の一部は大起伏山地をなしている。傾斜も北半の大部分は30°以上の急斜面を示している。中河内山地も起伏や傾斜の上ではこれに似ており、大・中起伏で、全体として30°前後のかなりの傾斜を示している。興津川山地だけはやや性格を異にし、高度400~200m、起伏量300m/km²以下の中・小起伏山地をなし、傾斜も30°以下、大半は20°以下の緩い斜面からなっている。

草薙台地(ⅡA)

本図葉中にはまとまった広がりをもつ台地・丘陵地はごく少ないが、その中ではこのくさなぎ草薙台地と後に述べる松野台地が最も大きなものである。

草薙台地は有度丘陵の北麓の一部に当るもので、この丘陵をとりまく台地状緩傾斜面のうちでは下位面すなわち国吉田面に相当するものである。構成層は小鹿礫層、草薙泥層を不整合に覆う厚さ15m以上の国吉田礫層である。なお馬走の谷をはさんで東側には小丘陵地があるが、ここではこれもこの台地に含めてある。

嶺台地・丘陵地(ⅡB)

巴川流域低地内の東名清水インターチェンジ付近にある鳥状の小丘陵地と小段丘地で、現在では相当程度の人工改変を受けている。丘陵地を構成するものは、嶺層と呼ばれるやや固結度の高い洪積砂礫層である。

松野台地(ⅡC)

本図葉のほぼ中央、安倍川の右岸にある台地で、安倍川流域および本図葉中における最大規模の河岸段丘である。海拔140~160mと160~200mとに高低2段の段丘面を有し、それぞれは層厚数m以上の見事な段丘礫層で構成されているが、上位面の方が発達がよく、上流の津渡野、野田平の段丘もこの面の続きに当たっている。

なお本図葉では大規模な段丘はこの松野以外には存在しないが、小規模・断片的なものほとんど全ての河谷沿いに数多く分布している。それらは少なくとも数段に及んでいるので、谷毎の厳密な対比は不可能に近いが、地形分類図では先の松野の上位面およびそれに近いものを「高位砂礫台地」、下位面およびそれに近いものを「中位砂礫台地」、それ以下のものを「低位砂礫台地」として、3群に分類してある。これらの段丘群の多くは、

面自体が小規模である上、背後の急な山地から多量の崖錐・崩壊物質の供給を受けるため、面直下は角礫で構成されており、円礫の見つからぬことも多い。なおこの高位面のさらに高方にも、段丘状の小平坦面の存在することがあるが、それらでは現在までのところ円礫層が見つかっていない。

安倍川流域低地（Ⅲ A）

安倍川水系の谷底低地のことで、安倍川本流の谷底低地のほか、西河内川、中河内川、足久保川、内牧川などの支流の谷底低地(以上Ⅲ A₁)と、薬科川およびその支流の谷底低地(Ⅲ A₂)がこれに含まれる。一般に高燥な砂礫質の低地であるが、その幅は最大の安倍川本流のそれでも2.5 km以下にすぎず、しかもそのほぼ全体から3分ノ1近くまでが河原そのものの面積で占められている。谷底低地の両側は、急崖をなす谷壁・山腹斜面や段丘崖で限られており、また小支谷の流入地点には小規模な崖錐や沖積錐の発達が数多く認められる。

なお薬科川流域の柄沢川、坂本川、水見色川、荒沢川（^{ふこうり}富厚里）などの支谷は、いずれもNNE—SSW方向をとる適従谷であるが、それらの谷底やさらにその支谷底(水見色)は土石流状の粗大な物質からなっている。

巴川流域低地（Ⅲ B）

本図葉における最大の低地で、これは三角州・後背湿地性の低湿地と、やや高燥な小扇状地群、海岸近くの比較的高燥な砂堆地、海岸線の人工埋立地の4つの地形単元に大別される。このうち最大の広がりを示すのは最前者で、これには巴川上流の「^{あさばた}麻機低地(Ⅲ B₂)」と中流の「巴川中流低地(Ⅲ B₄)」、さらに「^{こまごえ}矢部・駒越海岸低地(Ⅲ B₇)」が含まれる。麻機低地は、本図葉のすぐ南(静岡図幅)に存在する長沼一古庄を結ぶ自然堤防状微高地と、長尾川の天井川とによって閉塞された浅い皿状の窪地であって、南からの安倍川の旺盛な堆積作用もここまでは達せず、近年まで広い沼沢地としてとり残されていたところである。海拔6 mにも満たない盆央には現在でも^{あさばた}浅畑沼をとどめており、付近一帯はしばしば内水の湛水害をみているし、昭和49年7月の集中豪雨の際にも最大2 m近くの湛水を蒙った。この盆状地の表層は、泥炭もしくは泥炭化物を含むきわめて軟弱な泥層で構成されており、その厚さは一般に3～10 m、ところによっては10 m以上の厚さにも達している。

つぎの巴川中流低地もほぼ同様の低湿地で、清水砂堆地背後のラグーンが埋積されてきた浅い皿状地である。盆央の長崎一能島付近は海拔5 m以下の低湿地で、昭和49年7月

の集中豪雨では、ここでも1.5 m前後の湛水害を経験した。

矢部・駒越海岸低地は、有度丘陵東麓の小扇状地と清水砂堆地の間を埋める低湿地であるが、表層の泥質層は前2者に比べてかなり薄くなっている。

つぎの小扇状地群は、巴川の本流に北から合流してくる巴川最上流部、長尾川、塩田川・^{やんばら}山原川がつくった「羽高低地(Ⅲ B₁)」, 「長尾川低地(Ⅲ B₃)」, 「塩田川・山原川低地(Ⅲ B₅)」と、南の有度丘陵内からの諸川がつくった「有度山北麓扇状地(Ⅲ B₆)」の4つに分れている。いずれも砂礫層からなる小規模な扇状地であるが、これらをつくった河川の多くは、現在では河道が固定されて天井川となっている。

つぎの砂堆地は清水の市街地を載せている部分で、内陸から海岸に向けて3列の南北砂堆列を形づくっている。内陸のものが最も古く、また最も高く、最高地点は海拔10m前後をなすが、海岸沿いのものでは2 m内外にまで低まっている(「清水砂堆地Ⅰ(Ⅲ B₈)」, 「同Ⅱ(Ⅲ B₉)」, 「同Ⅲ(Ⅲ B₁₀)」)。

最後の海岸埋立地(「清水港埋立地(Ⅲ B₁₁)」)は、^{おりど}折戸湾内につくられた人工の埋立地で、その成立は20世紀に入ってからである。

庵原川・波多打川流域低地(Ⅲ C)

庵原川と波多打川がつくった低地で、後者はごく小規模な谷底低地が存在するのみであるが、前者は庵原川とその支流の^{やまきり}山切川の谷底低地のほか、小規模な扇状地とその前面の三角州性の低地をも含んでいる。

興津川流域低地(Ⅲ D)

興津川とその支流の中河内川の谷底低地がその主体で、それに小支流の谷底低地も含まれる。低地の幅は狭く、両側は急な谷壁・山腹斜面と段丘崖で限られている。

5	5	5	6	6	6	6	6	9	5	6	7	7	8	4	7	6	6	5	4
4	5	5	6	6	8	5	8	9	6	6	8	7	8	5	6	5	6	6	5
5	4	5	7	5	6	5	7	8	4	7	8	8	7	5	6	6	5	5	5
4	6	6	6	5	7	4	7	8	5	7	9	9	5	5	6	5	6	5	5
5	6	6	5	5	5	6	6	9	4	5	9	8	6	6	4	5	5	4	5
5	5	6	6	5	5	5	6	6	5	6	7	7	7	5	2	3	4	4	5
6	6	6	6	5	5	4	6	4	6	5	7	8	5	6	4	3	5	4	6
6	6	7	6	5	5	4	4	5	3	5	6	7	5	6	5	4	3	3	6
6	6	6	6	6	7	5	6	5	4	5	8	7	5	6	7	4	3	4	5
5	4	5	6	5	7	5	6	5	4	5	9	6	4	6	5	5	2	4	4
5	6	6	6	7	7	6	5	5	3	5	7	6	6	6	7	6	2	4	4
6	6	6	8	5	4	4	5	5	2	5	7	6	6	7	6	5	3	3	4
5	6	7	7	5	4	3	5	5	2	5	6	8	5	6	4	5	5	2	4
5	6	6	7	4	5	6	4	5	3	5	6	6	5	5	5	5	5	2	3
4	7	6	7	5	5	5	5	3	3	4	4	5	5	5	5	4	2	0	1
4	6	6	4	5	5	5	4	4	3	1	4	4	4	4	5	2	2	0	0
4	6	6	4	4	4	5	4	4	3	2	4	4	4	4	4	1	0	0	0
5	6	5	5	5	4	4	4	3	0	3	3	3	2	4	3	0	0	0	0
5	5	4	5	5	3	4	4	2	0	3	1	2	2	3	1	0	0	0	0
5	6	2	5	4	4	4	5	3	0	3	0	1	1	0	0	0	1	0	0

起伏量図：起伏量は国土地理院発行・縮尺5万分ノ1地形図の各辺を20等分してうる各
方眼内の最高点と最低点との標高差を，下記階級区分によって表示した。

- 0 50m未満
- 1 50~100m
- 2 100~150m
- 3 150~200m
- 4 200~300m
- 5 300~400m
- 6 400~500m

7 500~600m

8 600~700m

9 700m以上

国 道 1号

149号

東名高速道路

主要地方道 井川湖・御幸線

静岡・春野・宮島線

梅ヶ島温泉・昭和線

清水（停）線

1級河川

安倍川水系

安 倍 川

蘆 科 川

新 間 谷 川

水 見 色 川

保 ヶ 沢 川

荒 沢 川

黒 俣 川

坂 本 川

諸 子 沢 川

内 牧 川

足 久 保 川

八 十 岡 川

相 沢 川

油 山 川

浅 間 沢 川

安倍大沢川

安倍中河内川

西河内川

玉川大沢川

八重沢川

聖沢川

2級河川

巴川水系

巴川

大沢川

山原川

塩田川

草薙川

継川

長尾川

則沢川

浅畑川

庵原川水系

庵原川

山切川

波多打川水系

波多打川

興津川水系

興津川

中河内川

神沢原川

湯沢川

布沢川

黒川

石沢川

地形分類図

文 献

- 松本繁樹・北川光雄・浅黄谷剛寛（1971）：20万分ノ1土地分類図（地形分類図）—静岡県— 経済企画庁
- 土 隆一・松本繁樹（1971）：20万分ノ1 静岡県地震防災基礎図，静岡県
- 門村 浩（1966）：静岡地域の地盤と防災上の問題点（付図共） 静岡地域およびその周辺地域の防災上の諸問題 1965年度静岡県防災地学調査報告書 7～30
- 市瀬由自（1966）：庵原山地西部および有度山塊の地沁りと崩壊 静岡地域およびその周辺地域の防災上の諸問題 1965年度静岡県防災地学調査報告書 79～86
- 土 隆一（1959）：日本平とその周辺の地形発達史 地理学評論 32 (12), 642～652
- 静岡大学地学教室（1974）：静岡県の地質（付地質図） 静岡県

Ⅱ 表層地質図

総論

本図葉は静岡市・清水市の一部とその北方山地を中心とした区域で中央にアルカリ玄武岩を主とする竜爪層群が南北に狭く帯状に分布し、その東側は糸魚川—静岡構造線を境にフォッサマグナ南部の新第三系からなる庵原山地、一方、西側は十枚山構造線を境に古第三系瀬戸川層群の瀬戸川山地が赤石山地の前山としてひろがり、ついで四万十層群の赤石山地へ連なる。

これら山地の南側に安倍川下流の谷底平野、静岡平野の北部、それに清水平野の大部分がひろがる。

1 沖積平野（未固結堆積物）

安倍川やその支流の藁科川の谷底平野では主流の氾濫原はほとんど礫層からなるが、蔭になる部分ではときにシルト層がはさまれる。安倍川の谷底平野における礫層の厚さはこの図幅の南端近くでも60m以上に達する。

静岡平野と清水平野は有度丘陵北側の狭い区域を通じて連なっている。静岡平野は安倍川の河口扇状地平野であるが、この図幅の範囲はその北縁部にあたり、末端の泥質低湿地—浅畑低地がひろがり、泥層の厚さは30m近くに達する。この低地は東へ清水平野に連なっている。したがって、清水平野は主体は三角洲性の低湿な平野であるが、庵原山地に比較的大きい流域をもつ瀬名川や伊佐布川の谷底平野から出口にかけては礫質扇状地がひろがり、礫層が主体である有度丘陵の開析谷出口には小扇状地がつくられ、また、有度丘陵の東側は有度丘陵をつくる基盤洪積層の波蝕台地やその上のにる砂洲、砂丘などがあってきわめて層相の変化に富んでいる。

2 洪積層（未固結ないし半固結堆積物）

洪積世の段丘堆積物ないしその相当層は本図葉内には限られてしか分布しない。

清水平野の南側には有度丘陵の構成層である中位・高低段丘礫質堆積物が分布し、また平野北部にも波蝕段丘や小丘陵としてわずかに残されている。そのほか、安倍川流域に中位・高位段丘礫質堆積物が、波多打川流域に高位段丘礫質堆積物が分布する。これらの高位段丘堆積物は過去の主流の堆積物というよりもそれに流入する小谷の扇状地堆積物と考えた方がよい。

3 新第三系（固結堆積物）

新第三系は竜爪山地をつくる竜爪層群，庵原山地をつくる静岡層群，和田島層群，小河内層群とその上にくる清見寺層群や川合野層群からなる。

竜爪層群は大部分アルカリ玄武岩類でときに頁岩をはさむ。静岡・和田島・小河内の3層群はいずれもフリッシュ型のリズミカルな砂岩・頁岩の互層からなる。地質時代はいずれも中新世下部とされるが，衝上断層で境され，詳しい層序関係は未詳である。和田島・小河内両層群は上位に厚い礫岩層となるが，これが清見寺・川合野両層群で含有貝化石と類似の層相から中新世後期とされている。これらの新第三系は全体としては南北性のゆるやかな褶曲をなすが，衝上断層の付近では細かい褶曲が見られ破碎性に富むことが多い。

4 古第三系（固結堆積物）

古第三系は瀬戸川層群と呼ばれ，本図葉の西半部に広く分布する。この部分は瀬戸川層群の中南部にあたり，頁岩層，砂岩層，および砂岩・頁岩互層からなる。下位の頁岩層中には上部に塩基性凝灰岩層，下部に玄武岩溶岩および凝灰岩がはさまれよい示準層となる。後者はこの図葉内には露出しないが地質断面図の最下位に彩色してある。瀬戸川層群には剪断褶曲が普遍的で破碎性に富む。

5 中生界（固結堆積物）

中生界の四万十層群（又は三倉層群）は本図葉の北西縁に一部が見られる。古第三系とは笹山構造線で境され，砂岩，頁岩およびそれらの互層からなる。

四万十層群は，瀬戸川層群とちがって，砂岩の間の迂り帯や烈しいレンズしゅう曲が特徴である。四万十層群は岩石そのものは固結堆積物であるが，笹山構造線や十枚山構造線で示されるようにフォッサマグナの断層運動で引きずられたので全体が細かく破碎されている。厚い風化殻の存在や地迂りの頻発もこれが大きな素因となっている。（土 隆一）

<参考文献>

松田時彦（1961）：富士川谷新第三系の地質，地質雑，**67**，79—99。

大塚弥之助（1944） 静岡県庵原郡両河内村付近の地質構造，震研報，**21**，394—413。

徳山 明（1922）：静岡地域の基盤地質構造の問題点（1）：静大・教育研報（自然科学）
 (2) 67—86。

土 隆一（1971）：静岡・清水平野の地形・地質について，竹原記念論文集，183—189。

土 隆一編（1974）：20万分の1 静岡県地質図および静岡県の地質，154pp，静岡県。

Ⅲ 土 壤 図

1 岩屑性土壌

(A)C断面をもつ土壌で、(A)層の発達は弱く、かつ浅い。一般に表層部は泥質であるが、下層は石礫質の未固結堆積物で占められている。これに属する土壌統は茂畑2統で、波多打川上流部に位する高位段丘の斜面に分布し、主としてヒノキ人工林、竹林として利用されている。

2 残積性未熟土壌

多少にかかわらず侵蝕の影響がみられる(A)C断面をもつ土壌である。腐植の滲潤が少なく、わずかに暗色を呈する(A)層の発達は弱く、かつ浅い。褐色ないしは黄褐色を呈するB C、C層よりなっているものが多い。これに属する土壌統は茂畑1統および有度山1統である。茂畑1統は波多打川上流に位する高位段丘の段丘面に分布し、主としてヒノキ人工林として利用されているが生長は悪い。有度山1統は有度山丘陵内の段丘面にあらわれ、主として常緑広葉樹林を形成しているが、図幅内の分布は同丘陵北麓下部にわずかに分布しているにすぎない。

3 洪積性未熟土壌

洪水の堆積物からなる未熟土壌で、土性はこまかい粒径のそろった砂に、微砂と粘土を含む砂壤土で、腐植の滲透はよい。下層には10~20cm大のやや扁平な円礫を含むが、B C層では少なく、G層では多い。これに属する諸川1統は足久保川右岸に帯状に分布し、竹林または人工針葉樹林に利用されている。

4 人工未熟土壌

これは、本地域の場合、庵原地区の沖積平地に分布する水田に山土を盛土して造成した畑地の土壌である。一般に土壌化がすすまず、未熟な状態にあるので、この名称を用いた。盛土の材料には周辺の山地斜面に分布する黄色土壌、赤色土壌が用いられている。これに属する土壌統は下谷統と草ヶ谷統で、前者は后者よりも断面下部の排水状態がやや不良である。主に柑橘園として利用されている。

5 厚層黒ボク土壌

土色の明度、彩度ともに2またはそれ以下の黒色の表層土が50cm以上の厚さをもつもので、腐植含量が高く、静岡県東部の富士、愛鷹火山麓に分布する厚層黒ボク土とかなり類

似した形態的、理化学的特性をもっている。これに属する土壌統のうち、松野1統は段丘上に、平野2統は第三紀の固結堆積岩からなる山地斜面に、有永統は玄武岩からなる賤機山斜面に分布し、主に茶園、柑橘園に利用されている。平野1統は図幅北部で安倍川左岸に位する高位段丘の緩斜面に分布し、主としてスギ、ヒノキの人工林として利用されている。

6 黒ボク土壌

極暗褐色および明度、彩度ともに2またはそれ以下の黒色の表層土（A層）が25cm以上50cm未満の厚さをもつもので、腐植含量が高く、粗しょうなA層の下に、風化がすすみ、粘土分に富むち密なB層が存在する。静岡県東部の火山山麓に分布する黒ボク土とかなり類似した諸特徴をもっている。これに属する土壌統のうち寺尾統は段丘上に、布沢2統は第三紀層固結堆積岩からなる山地斜面に分布し、主に茶園に利用されている。坂本統は図幅西部の大山、突先山の稜線部に帯状に、竜爪4統は玄武岩を母岩とする真富士、竜爪山塊の緩凸な尾根すじに分布し、主として天然広葉樹林を形成するが、ときにはヒノキ人工林として利用されている。また、布沢1統は庵原山地の緩凸な尾根から山腹上部にかけて分布し、主としてヒノキ人工林として利用されている。

7 乾性褐色森林土壌

湿润温帯の森林植生下に発達するA、B、C層位配列を有する土壌である。この土壌は主として森林植物の落葉落枝とそれらの不完全分解物からなる粗腐植が、地表面にやや厚く堆積している。粗腐植層の下部には黒褐色のA層があり、やや判然として褐色ないしは淡褐色のB層に移行するが、B層上部には乾性破碎によって発達した独特な土壌構造がみられる。これに属する土壌統は落合1統、和田島1統、竜爪1統で、そのうち、落合1統は主として安倍川右岸の山地および薬科川流域に、和田島1統は興津川上流の庵原山地に、また竜爪1統は玄武岩を母岩とする真富士、竜爪山塊に分布する。いずれも尾根すじに出現し、ヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林を形成している。

8 褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌と同様な森林帯にあるが、常に地中水分に富む山腹斜面に多くあらわれ、黒褐色を呈するボウ軟な厚いA層が発達し、その下部にある褐色のB層に漸変している。これに属する土壌統は、落合2統、和田島2統、竜爪2統で、それぞれ落合1統、和田島1統、竜爪1統に隣接した山腹および沢すじの急斜面にあらわれ、主としてスギ人工

林として利用されている。

9 湿性褐色森林土壌

上記の両褐色森林土壌と同じ森林帯に属するが、常に水分が集まりやすい斜面下部や谷底の緩斜面にあらわれる。黒褐色のA層と暗褐色ないしは灰褐色のB層よりなり、両者の推移は漸変している。これに属する土壌統は落合3統，和田島3統，竜爪3統で、それぞれ落合2統，和田島2統および竜爪2統に隣接した沢すじの緩斜面に分布し、主としてスギ人工林に利用されている。

10 乾性褐色森林土壌（黄褐色）

乾性褐色森林土壌の分布地帯のうちで、新第三紀の山地丘陵や古第三紀の小起伏低山地の尾根すじもしくは斜面上部にみられる土壌である。暗褐色を呈し、弱度に発達したA層と一般に埴質かつ堅密で、7.5YRないしは10YRの色相を呈し、明度、彩度の高いB層およびC層を有する。これに属する土壌統には宇津谷1統，梅ヶ谷1統がある。前者は安倍川右岸で図幅南縁部にあたる古第三紀の低山地に、後者は新第三紀に属する庵原低山地の尾根すじに分布し、ともに天然広葉樹もしくはヒノキ人工林に利用されている。

11 褐色森林土壌（黄褐色）

乾性褐色森林土壌（黄褐色）の分布する森林地帯の斜面下部にみられる土壌である。A層は暗褐色で、発達が弱く、B層およびC層は埴質で、7.5YRないしは10YRの色相を有し、明度、彩度ともやや高い。これに属する土壌統は宇津谷2統および梅ヶ谷2統である。前者は宇津谷1統に隣接した山腹斜面に、後者は新第三紀に属する庵原山地の斜面に分布し、主としてヒノキ人工林または天然広葉樹林を形成している。

12 赤色土壌

湿润気候の常緑広葉樹林下に生成された土壌で、うすい暗褐色のA層の下にくるB層は彩度・明度ともに高く、5YRまたはそれよりも赤い色相をもっている。一般にA層の腐植含量が低く、B層は粘土化がすすみ埴質である。これに属する土壌統は、いずれも洪積世の温暖期に形成された赤色風化殻を母材とするもので、伏木統は興津川流域の高位段丘に、飯田統は庵原山地の斜面に分布し、主に茶園と柑橘園に利用されている。また西久保統は清水市街にある洪積層丘陵の上部に、鳥坂統は庵原低山地の南斜面に多く、主として天然常緑広葉樹林を形成するが、ときには竹林やヒノキ人工林として利用されているところもある。

13 黄色土壌

湿潤気候の常緑広葉樹林下に生成された土壌で、うすい暗色のA層の下のB層は5 YRよりも黄色の色相をもつものである。一般にA層の腐植含量が低く、B層は粘土化がすすみ植質である。これに属する土壌統のうち、寺島統と伊佐布統は第三紀の固結堆積岩からなる山地斜面に、賤機1統と麻機1統は玄武岩からなる賤機の山稜斜面に、松野2統は河岸段丘に分布し、主に茶園、柑橘園、普通畑に利用されている。

14 細粒褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬA層の下に暗黄灰色または黒褐色のB層をもち、土性が細粒質の土壌である。これに属する土壌統のうち、湯ノ島統は麻機北2統に比べ土壌体が浅く砂礫層が地表下30cm以内に出現する。河川の沖積平地に分布し、主に茶園、柑橘園に利用されている。

15 褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬA層の下に暗褐色のB層をもち、土性が中粒質の土壌である。これに属する大谷津統は、一色統に比べ土壌体が浅く、砂礫層が地表下30cm内外のところに出現する。河川の沖積平地に分布し、主に茶園、柑橘園、普通畑に利用されている。

16 粗粒褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬA層の下に暗褐色のB層をもち、土性が粗粒または礫質の土壌である。これに属する土壌統のうち、長島統は麻機北3統に比べて土壌体が浅く、砂礫層が地表下30cm以内に出現する。内牧統は礫質である。河川の沖積平地に分布し、茶園、柑橘園、普通畑に利用されている。

17 細粒灰色土壌

土性が細粒質で、土層断面の色相は灰色を呈し、斑紋の存在がみられ、地表下80cm以内にはグライ層の出現がみられぬものである。これに属する土壌統は、麻機北1統、両河内統で、前者に比べ後者は土壌体が浅く、地表下30cm以内に砂礫層が出現する。河川の沖積平地に分布し、水田、普通畑、茶園に利用されている。

18 灰色低地土壌

土性が中粒質で、土層断面の色相は灰色を呈し、斑紋の存在がみられ、地表下80cm以内にはグライ層の出現がみられぬものである。これに属する土壌統は、諸川2統と下与左衛門新田統で、前者に比べ後者は土壌体が浅く、地表下30cm以内に砂礫層が出現する。河川

の沖積平地に分布し、水田、普通畑、茶園に利用されている。

19 細粒グライ土壌

土性が細粒質で、地表下50cm以内にグライ層が出現するものである。これに属する土壌統のうち、西ヶ谷統と寺門1統は地下水位が高く、その影響（グライ化）がほとんど地表まで及んでいるが、前者に比べ後者は土壌体が浅く、地表下30cm以内に砂礫層が出現する。浅畑沼統と麻機2統は、前記の2土壌統に比べ地下水位が低く、麻機2統は、浅畑沼統に比べ土壌体が浅く、地表下30cm以内に砂礫層が出現する。河川の沖積平地に分布し、水田に利用されている。

20 粗粒グライ土壌

土性が粗粒質で、地表下50cm以内にグライ層が出現するものである。これに属する土壌統は、原田統で、河川の沖積平地に分布し、水田に利用されている。

21 泥炭土壌

これは地表から50cm以内に厚さ20cm以上の泥炭層、黒泥層をもつ土壌をいうが、本地域のものは、表層部に泥土が多く混合してヨシ泥炭の分解がかなりすすんでいる。これに属する土壌統は麻機3統で、静岡市麻機地区の低湿地に分布し、水田、蓮田に利用されている。

(近藤鳴雄， 県富美夫， 加藤芳朗， 浜田竜之介)

Ⅳ 傾斜区分図

本図葉は海岸線を含みながらも、その過半が大・中起伏の急峻な山地で占められ、しかも海拔 1,000m を越す高山が10山以上も存在し、最高点は1,401m にまで高まるので、斜面の一般傾斜も他の図葉にはあまり例を見ない大きな値を示している。

安倍川本流より西側の安倍山地では、斜面の傾斜は一般に $S_6(30^\circ \sim 40^\circ)$ を示すが、見月山周辺ではそれが $S_7(40^\circ \text{以上})$ の急斜面となっている。これと同じ S_7 の急斜面は、安倍川の本流や支流の西河内川、安倍中河内川、薬科川などの谷壁斜面部にもほぼ連続して存在していて、谷底低地とは不協和的な接合を見せている。これとは逆に大岳 (1,108.7m)、天狗山 (1,020m)、突先山 (1,021.7m) などの海拔900~1,100m の山頂付近や、これよりもやや低い600~700m 高度の山頂付近には、傾斜のやや緩い $S_8(8^\circ \sim 15^\circ) \sim S_5(20^\circ \sim 30^\circ)$ の斜面が分布していて、それ以下の急な山腹斜面とは明瞭な対照を見せている。これらの緩斜面の多くは、前輪廻性の侵蝕面遺物であろうと思われる。

安倍川本流より東側の竜爪山地では、稜線付近に $S_4(15^\circ \sim 20^\circ) \sim S_5$ の緩斜面が存在するほかは、山地のほぼ全体が $S_6 \sim S_7$ の急斜面で占められている。ここから東方の庵原山地になると、傾斜は全体としてやや緩くなるが、それでもなおその大部分は先の安倍山地とほぼ同じ程度の斜面分布を示している。なお巴川流域低地に向けて北から南に突き出す山地部分では、東西に非対称なケスタリッジの認められることが多く、西側の斜面は東側のそれに比べてやや緩くなっている。なおまたここでの山麓線は、急な山地斜面と低平な沖積面とが直接接し、いわゆる沈水型の不協和的接合を見せている。庵原山地のうち、布沢川—庵原川以東の興津山地だけは上記の山地とはやや性格を異にしている、ここでは山地の開析が進んで細かい山ひだが入り組んでいるが、傾斜はかなりに緩く、全体として $S_5 \sim S_4$ 程度となっている。なお竜爪山地内の俵峰や庵原山地内の寺社畑一貝伏付近、吉原付近などには、地形分類図で「山地内における緩傾斜地Ⅰ」として分類した $S_2 \sim S_3$ の緩斜面が存在している。

本図葉内では、大きな低地としては安倍川本流の谷底低地と巴川流域の低地とがあるがそれらの傾斜は大部分が $S_1(3^\circ \text{未満})$ となっている。なお台地のうち草薙台地は S_1 であり、松野台地も面上は S_1 であるが、後者では面の広がり方が狭いので、周縁の斜面部も加味して S_2 として表現してある。

(松本繁樹, 浅黄谷剛寛)

V 水系・谷密度図

水 系

本図葉中の水系はいずれも駿河湾内に流入するもので、そのうち主なものは安倍川、興津川、巴川の3つである。

このうちでは安倍川が最大の水系で、本流(50.8km)は図葉のほぼ中央を北から南へ直線状をなして流下している。本図葉内ではやや広い礫河原以外にはほとんど谷底平地をもたず、両岸はいきなり急な谷壁で限られている。この川には数多くの支流が合流しているが、そのうち右(西)岸側から流入するものは、いずれも北西—南東方向をとり、河谷の規模も大きいのに対し、左(東)岸側からのそれは北東—南西ないしは東—西方向をとっていて、しかも短小な河谷に限られている。前者には蘘科川(29.2km)、足久保川(9.2km)、西河内川(8.7km)—安倍中河内川(20.8km)などがあり、後者には安倍大沢川(1.0km)、八重沢川(0.9km)などがある。安倍川の支流が東西でこのように非対称なパターンを示すのは、赤石山地形成時の傾動的隆起に支配されたもののようで、前者の北西—南東方向の流路は、この山地の原地形の一般傾斜に従ったいわゆる必従川の性格を示しているものと思われる。なお蘘科川の支谷には、新聞谷川(6.0km)、水見色川(7.0km)、坂本川(2.0km)など、先の北西—南東方向に直交する北北東—南南西方向をとっているものが多いが、これらは地質構造に支配された適従川の性格をもちあわせているものと考えられる。

安倍川の東にあつて、南南東ないし南東流する興津川(21.7km)は、その流路の一部は適従川の性格をもつものと考えられているが、右岸側からは黒川(1.4km)、布沢川(2.6km)、左岸側からは中河内川(8.9km)などの支流を合わせている。河口は本図葉中にはなく、東隣りの吉原図葉中にあつて、興津の市街地の東方で駿河湾に流入している。

竜爪山地に源を発する巴川(18.0km)は、北の庵原山地からの長尾川(8.9km)、塩田川(3.0km)、山原川(2.9km)などと、南の有度丘陵からの草薙川(3.9km)、大沢川(4.1km)などの支流を合わせて、清水の市街地の先で折戸湾に注いでいる。ところでこの川は、低湿地上を流れる低勾配の平地河川の特徴を強く持ち合わせていて、実際豪雨時には洪水・氾濫をたびたびくり返してきた。というのはこの川の上流に当る浅畑沼付近ですら、海拔高度はわずか6m前後にすぎないし、しかもこの沼に向けては静岡扇状地からの湧・排水の一部が集まっているからである。

なお以上の3水系のほか、直接駿河湾に流入する小河川として、庵原川(6.7km)と波多打川(4.3km)との2河川がある。

谷密度

本図葉では急峻な山地が広い面積を占めて分布するため、谷密度は一般に大きな値を示している。もっとも広い面積を占めるのは、谷密度30~50/km²の部分で、これが全面積の3分ノ2近くを占め、ついで20~30/km²の部分が約5分ノ1、50~60/km²の部分が約10分ノ1となっている。逆に20/km²以下の部分は、全体の7.5%程度にしかすぎない。

図葉中央の安倍川本流沿いの山地では、計測上この川の広い谷底が含みこまれるためもあって、谷密度は一般に20~30/km²とやや小さいが、これより西方の安倍山地になると、その値は30~50/km²とずっと大きくなり、さらにその中心の大棚山や高山(716.9m)付近一帯は、40~60/km²という大きな値を示している。いっぽう安倍川の東側の山地では、谷密度は一般に40~60/km²で、先の安倍山地よりも若干大きくて、とりわけ文珠岳から高山(836.4m)にかけての部分は、60~70/km²という非常に大きな数値を示している。布沢川一庵原川以東の興津山地では、海拔高度、起伏量共に小さな山地であるにもかかわらず、谷密度は50~60/km²という大きな値を示していて、山地の開析が進んで、細かい谷の入り組んでいることを物語っている。

なお本図葉中の低地としては、巴川流域低地が最大の広がりを示すが、ここでの谷密度は人工水路も数えて20/km²未満にとどまっている。

(松本繁樹, 浅黄谷剛寛)

Ⅵ 利水現況図

本地域は、年間平均降水量2,200mmとなっており、比較的雨量の少ない地域である。地域住民の水に対する関心も強く古くから大規模な利水事業が実施されており、また現在も進められているがその地域別の利水状況の概要は次のようである。

1 安倍川用水地域

本図葉の静岡市の水田地域は、安倍川用水事業が昭和38年水利状態を改善するため静岡用水集水渠を延長して取水量の増加を図りかつ安倍川表流水に依存している樋管取水口の統合を計り、新たな水源より導水して用水を補強することを目的に着手し、昭和46年に完了している。

3 静岡・清水の樹園地及びその他の地域

静岡・清水の樹園地地域は、静岡庵農業水利事業の受益地域にあり、水源は富士川から取水し発電を行なっている日本軽金属KKの放水路に求め蒲原町高浜地先にポンプ5台の水源機場を設け導水し、みかん、茶のかんがい、防除、施肥の多目的用水である。

本事業は昭和48年度着手し、国営事業(昭和52年度完了予定)、県営事業(昭和57年度)及び団体営事業をもって実施中である。

また工業用水、上水道についても昭和41年度着手し、昭和50年度完了予定をもって静岡地区にも多量の供給が計画されている。

(白井 春雄)

Ⅶ 土地利用現況図

1 農地

本地域の中央部を南北に流れる安倍川流域の山地においては、安倍川の本流及びその支流に沿って形成されている河岸段丘や山地斜面は主に茶園として利用されているが、静岡市に属する油島以南には柑橘園が散在している。安倍川本流の東に竜爪山の嶮嶺の延長として細長く形成されている賤機山の山稜斜面は主に柑橘園に利用されているが、西側斜面には小面積ながら茶園としての利用がみられる。安倍川とその支流の河川によって山間に形成されている狭い沖積平地は、主に水田、茶園及び畑地に利用されているが、安倍川と賤機山との間に分布する水田の転換畑は、ほとんどすべてが柑橘園に利用されている。本地域の北東にあたる興津川流域の山地においても、興津川、中河内川とその支流に沿って形成されている河岸段丘上や、山地斜面上は、主に茶園、柑橘園として利用されている。これらの河川によって山間に形成された狭い沖積平地は、主に水田として利用されていたが、最近では転換による茶園としての利用面積が増加している。興津川流域山地の南部にあたる庵原山地の斜面と段丘上は、柑橘園としての利用面積が広く、全国でも屈指の柑橘生産地である。茶園としての利用も主に山地西側斜面のところどころに見られるが小面積である。また、山間の狭い沖積平地には、水田と茶園及び水田転換による柑橘園が分布している。

本地域南部の安倍川、巴川の沖積平野は、水田としての利用面積が広がったが、最近いちじるしく都市化がすすみ、工場、住宅用地への転用が激増したので、水田面積はしだいに減少してきている。静岡市麻機南の低湿地は蓮根栽培地に利用されているが、麻機沼は原野として未開発のまま残されている。巴川の自然堤防の部分は排水がよいので茶園や柑橘園として利用されているところがあるが、小面積である。

本地域西南端の一部は有度山丘陵北側斜面下部の低位段丘で、柑橘園、茶園、植木栽培地に利用されているが、最近住宅用地への転用もかなりすすんでいる。

2 林地

〔地況〕

本地域は、中央部の竜爪山、文珠岳（1041m）、北部の真富士山（1337m）を分水嶺とし、静岡市側と清水市側に分かれ、静岡市側は安倍川、清水市側は興津川流域にある。本

地域の主要な山は、前記の竜爪山、文珠岳、真富士山、北西部の大岳（1109m）、安倍川支流の藁科川と西河内川との分水嶺にある天狗岳、同じく藁科川と足久保川の分水嶺にある突先山（1022m）等で、1000m程の山が散在している。

〔気 候〕

気候は温暖で、静岡市で年平均気温16°C、温量指数はおおよそ130である。降水量は年平均では約2300mmで、4月～8月に多く、特に5月、7月は月平均300mmを越しており、冬期時12月、1月、2月はほぼ100mmと少ない。

〔森林現況〕

本地域の林相は人工林が多く、人工林率はおおよそ72%になり、特に旧玉川村（図幅中、北西部一帯）は地位も高く、人工林化も進み人工林率78%である。

樹種は、人工林ではほぼ100%がスギ・ヒノキ林で占められ、一部シイタケ原木林としてクスギ林等がある。天然林はほとんどが広葉雑木林で、主要樹種はカシ類、シイ類、ナラ類等で、高い所ではシデ等も混交する。

人工林率、地位を旧市町村別にみれば、概略次表のとおりである。

	旧玉川村	旧大川村	旧清沢村	旧大河内村	旧静岡市	清水市
人工林率	78%	73	63	62	68	77
地 位	2位	3	3	4	3~4	3~4

その外、清水市側には竹林が多く、旧静岡・清水両市南部では、海岸に面した傾斜地はミカン園に開墾され、急傾斜地、やせ地等条件の悪い所に山林が散在している。

（近藤鳴雄・白井直方）

1975年3月 印刷発行

静岡開発地域
土地分類基本調査

清 水

編集発行 静岡県農地部農地企画課

静岡市追手町9番6号

印刷 株式会社 大村印刷所

静岡市常盤町2丁目12